

東京歯科医学専門学校 『臨床歯科学叢書』の書誌学^{*1}

森山徳長 春日芳彦 小坂剛也
石川達也 長谷川正康^{*2}

要旨：東京歯科医学専門学校の教科書は、明治40年より大正6年までの2回にわたる歯科講義録およびその合本と、その後に発行された書き下し単行本のシリーズ歯科学叢書が主体である。その他に、大震災後臨床歯科学叢書が主として花沢 鼎教授により編纂され、臨床ハンドブックまた教科書として用いられた。本報告はこの叢書の書誌学的詳細を述べたものである。

Textbooks of the Tokyo Dental College, College Standard, started with two series of lecture-notes and its bounded volumes from 1907 to 1917. After that the monograph texts "Dental Textbook Series" started in 1916. Then in 1925 Prof. Kanae Hanazawa began to compile "Clinical Dental Textbook Series" which were the handy clinical manual chiefly in the field of conservative dentistry. The bibliography of this series is described in detail.

Key words：東京歯科医学専門学校 Tokyo Dental College, College Standard, 臨床歯科学叢書 Clinical Dental Textbook Series

I はしがき

東京歯科大学百年の歴史の過半を占める東京歯科医学専門学校の教科書は、まず新纂歯科学講義(明治40～44年)¹⁾、および歯科学講義(大正元～6年)²⁾と連続して刊行された。この2種類の歯科講義録は版を重ね、またその合本がそれぞれ3および12巻揃いで出版された。

それに引続いた書き下し教科書として『歯科学叢書』が大正5年～昭和19年にかけて15編発行された³⁾。次に大正14年から主として花沢 鼎により、

表1 臨床歯科学叢書 刊行予定 大正14年6月

Table 1 Predicted Publication of the Clinical Dentistry Series

編	著 者	書 題
1	花沢 鼎・岩沢 力	歯槽膿漏ノ病理及療法ノ梗概
2	花沢 鼎	根管ノ解剖、清掃、消毒
3	花沢 鼎	根管充填
4	花沢 鼎・杉山不二	歯牙再植術
5	花沢 鼎	歯髓切断法
6	花沢 鼎・安田康輔	ラバーダム防湿法
7	花沢 鼎	歯髓炎ノ症候診断及療法
8	遠藤至六郎	口腔外科臨床講義集

本稿で述べる『臨床歯科学叢書』として数編の単行本教科書が順次発行された⁴⁾。

もちろんその他にも多くの書き下しの単行本が発行され、それらが渾然一体となり第二次大戦前の本学教科書体系をかたちづくった。

本臨床歯科学叢書は第1巻が大正14年7月発行され、その緒言には表1のような書題が記載されている。

^{*1} Studies on the Bibliography of the Clinical Dentistry Series of the Tokyo Dental College

^{*2} Norinaga Moriyama, Yoshihiko Kasuga, Takeshi Kosaka, Tatsuya Ishikawa and Masayasu Hasegawa, Tokyo Dental College (東京歯科大学)

本稿要旨は第93回日本医史学会・第20回日本歯科医史学会合同学会(1992年6月4・5日於日本大学会館)において、春日が口演した。

第1編は大正14年7月15日⁵⁾、2・3編は奥付によると8月1日発行された^{6,7)}。第4編は原稿の最初の数頁が、本学に保存されているが、他の書誌学的事項は不明である。但し歯科学報に論文が連載されている⁸⁻¹⁰⁾。第5編は発行された事実は歯科学報の広告によりわかるが、他は不明である。第6・7編は恐らく発行されなかったと推定される。

一方、第8編は歯科学報に遠藤が長期間連載し、のちに昭和10年、本叢書とは別に単行本として出版された¹¹⁾。

以上1～3編の書誌学的詳細とその他の概要を報告する。

II 第一編 歯槽膿漏ノ病理及療法ノ梗概の書誌学

1 装 幀

本書は本学図書館に所蔵なく、国立国会図書館より相互貸借でコピーおよび扉頁の写真複写を入手した。2～3巻は驚色洋クロス装本なので、おそらく同様であったのかも知れない。11.5×18 cm 縦書。

2 書誌学的構成

扉—1, 序—2, 目次—2, 本文—37, 奥付—1 頁の計43頁の構成となっている。縦書き旧漢字片仮名交り文, 1頁14行43字詰の文語文である。文章の特長として著者名, 病名, 症状名などの記載はすべてドイツ語(一部ラテン語, 英語)が併記されていることである(図1)。

3 緒 言

緒言は「臨床歯科学叢書ノ刊行ニ際シテ」と題して

「本書は主に東京歯科医学専門学校に於て臨床実習にたづさわる学生に対して余等が講述したものを集めた謂はば臨床講義集と名づくべきものである。然し中には既に学会で報告したものもあり又歯科学報で発表したものもあるので是を小冊子に纏めて見ると記述の体裁や内容の程度が各編各別であることを免れぬ。是等は切に読者の寛恕を希望する。目下の処では本叢書として左記の諸編が刊行せられることになって居るし尚追々増補してゆく予定である。(原文は旧漢字片仮名)

大正14年6月

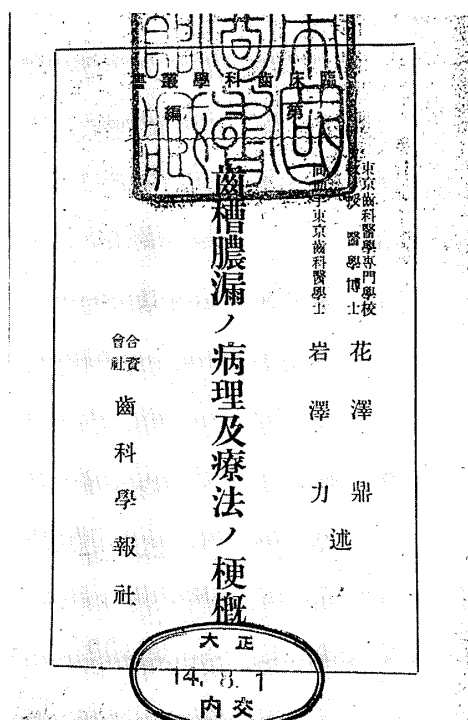


図1 歯槽膿漏ノ病理及療法ノ梗概の扉

Fig. 1 Title Page of "Outline of the Pathology and Treatment of Pyorrhea alveolaris"

東京歯科医学専門学校附属医院に於て
花澤 鼎」

と述べ表1に示す書名・著者が列記してある。

4 本 文

a) 目 次……………以下の19項目を挙げる。便宜上頁を記入した。

第1	Weski 氏分類 ……………	1
第2	Paradentosen ニ際シテ現ハレル主ナル病変……………	3
第3	歯槽膿漏ノ四型(花澤) ……………	4
第4	歯槽膿漏ノ一般的症候……………	6
第5	全身又ハ局所的疾患ト膿漏トノ関係……………	7
第6	歯槽膿漏ノ他部ニ及ボス影響……………	7
第7	診断……………	7
第8	前準備……………	9
第9	清掃法……………	9
第10	暫間的固定法 ……………	10
第11	盲囊即チ肉芽組織ノ処置 ……………	11
第12	知覚過敏ノ処置 ……………	12
第13	外科的療法 ……………	13

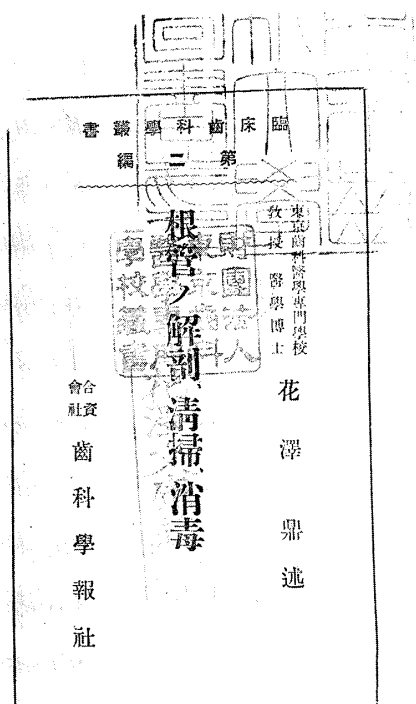


図 2 根管ノ解剖、清掃、消毒の扉

Fig. 2 Title Page of "Anatomy, Cleasing and Disinfection of the Root-canal"

第 14	再植術	14
第 15	マッサージ	14
第 16	後療法	14
第 17	永久固定法	15
第 18	「スケーラー」ノ種類	15
第 19	文献	17
付図		19 (～37)

b) 内 容

先ず第一の歯槽膿漏の分類法の代表として Weski の辺縁性歯周症 (Marginale Parodontosen) の分類を挙げている。これは全部性萎縮と一部性萎縮に分けてそれを細分したものである。一部性萎縮を非膿漏性と膿漏性に分け、後者が所謂現今まで歯槽膿漏と称せられたものであるとしている。

第二には主な病変 4 項目を箇条書きとし、簡単に解説している。

第三は花沢の 4 型分類とその説明がややくわしく述べられている。

第四以降第十八までは講義ノートの項目を箇条書きにしたもので、学生への臨床講義ノートの性格がよく現れている。

第十九文献は 1921～1924 年のドイツ文献 17 を挙げ、英米の方面における文献は之を略すと記している。恩師 Römer, その他 Weski, Adloff, Hiele, Josef などと, Neumann (5) と Widman (2) の文献の多いのが目立つ。

付図は 19～37 頁にわたり Neumann, Senn, Black, Tomkin, Darby-Perry, Bunting, Thorpe, Zerfing, Towner, Smith, Bates & Neumann 等考案者名を冠したもの, S. S. White のようにメーカー名表示, 南加大学型といった教育機関名を冠したもの等を図示している。

5 奥 付

大正 14 年 7 月 10 日印刷, 全 15 日発行。正価 35 銭。著者 花沢 鼎・岩沢 力。発行者 安井作太郎。発行所 歯科学報社となっている。

III 第二編 根管ノ解剖、清掃、消毒の書誌学

1 装 幀

本学所蔵本は鶯色洋クロス装で 2, 3 編が一括連続で製本されている。11.5×18 cm 縦書。

2 書誌学的構成

扉—1, 序—2, 目次—2, 本文—87, 奥付はなく広告頁 1 計 93 頁で, 第 3 編の扉頁に続いている。書体, 行数, 字数, 外国語の併記等すべて第 1 編と同じである (図 2)。

3 緒 言

臨床歯科学叢書の刊行に際しての表題で, 内容はすべて第 1 編と同文である。

4 本 文

a) 目 次

9 項目に分ち, それぞれが細分されている。便宜上頁数を目次項目に追加・併記した。

第 1 根管ノ解剖	1
1 プライスヴェルク氏法	1
2 フィッシャー氏法	3
3 アドロフ氏法	4
4 モーラル氏法	5
5 小野氏法	6
6 ファヅリー, アルロッタ氏法	7

7	グローヴ氏法	8
8	ヘス氏法	9
9	チュルチャー氏根管ノ解剖	15
10	奥村氏根管ノ解剖	19
第2	齶窩ノ分類	28
第3	疾病ノ診断	31
第4	補綴法ノ決定	33
第5	使用器械ノ整頓	34
第6	根管治療ノ準備的処置	34
第7	根管治療ノ梗概	37
第8	根管ノ清掃	39
1	第一回治療(髓室部ノ清掃)	40
2	第二回治療(根管ノ清掃)	42
3	壊疽性歯髓炎ノ処置	44
4	根管内異物ノ除去	45
5	根管拡大法	49
a	アルカリ類ノ応用	
b	酸類ノ応用	
6	根管清掃ノ困難ト其診断	55
第9	根管ノ消毒	57
1	根管消毒ノ必要ナル理由	57
2	根管ニ応用セラルル薬物ノ殺菌力	58
3	石炭酸合剤	65
4	チモール	66
5	フォルマリン	67
6	クロール	69
7	ヨード	74
8	銀(ハウ氏銀還元法)	77
9	電気消毒法	83
b)	内 容	

第1 根管の解剖については、Preiswerk が1901年に金属注入法によって、実験的に根管の構造をしらべ形態、数、分岐に大きな変化のあることを指摘したこと、しかし学界の承認を得るに至らなかったことから説き起している。しかし1908年Fischer がセルロイド根管法で追認した。すなわち根管の解剖は微細なる分岐や、横橋や網様吻合などにより極めて錯雑したものである。従って大白歯、上顎小白歯等からは歯髓を完全に除去することは不可能であると唱えた述べている。次に1913年 Adloff は Preiswerk の金属注入法を改良し、組織透明法により脱灰し、歯牙本来の形態を保存した透明標本を作ること成功した。翌1914年 Moral は Adloff 法を改良、墨汁を用い

た透明標本を作ったが、上顎大白歯100本のうち63%の近心頰側の第2根管を証明したとある点は注目すべきである。次の小野法(1917年)は、Moral の改良法でより鮮明な標本を作製し、Preiswerk 以来の知見を是認するものとなった。

これらと別に1913年イタリアのファゾリーとアルロッタ法は、朱を加えたゲラチンを注射器で加圧注入する法であった。この方法の改良法が1916年 Clove 法である。

1917年の Hesz の研究は5~55歳の3,000本の歯牙を用いた広範なもので、12~20歳の根管は比較的単純で分岐はないが、根端完成後20~40歳位の間に分岐が起り、40~55歳で単根歯は根端分岐傾向は静止し、複根歯ではその年代に増加する。根管においてもこの関係は同じである。そして個々の歯牙についての統計表を示している。

1922年 Hesz の下で乳歯と永久第一大臼歯について、広範な研究を行った Zürcher の報告は、乳歯についても側切歯では複根管がある新しい知見を発見し、また乳臼歯根は複雑な差別的構造を示し、上顎乳臼歯では近心頰側根が2根管となり、下顎乳臼歯では近遠心とも2根管となる。6歳臼歯に関しては根端發育完了した8歳以後に根管の分岐等の差別が現れる。下顎6歳臼歯で近心根の分離は15歳以前に34%の割合で終了する。上顎の場合は15歳以後にようやく分離が始まる。それに統計表を紹介している。

最後の奥付の1918年の発表は、主としてMoral や小野氏による墨汁透明標本608歯について、統計的に根管の種々な差異を統計表とし、大白歯については近・遠心各根管についての分類も行っている。花沢は、以上列举した諸学者の研究によって、根管は単純なものでなく、完全な処置は甚だ困難か全く不可能であると述べる。さらに、根管や根端の組織学的構造についての問題があり、更に複雑であると述べている。

第2の齶窩の分類は 1) 小窩裂溝 2) 軸面(隣接)面歯頸部 3) 前歯隣接面 4) 臼歯隣接面に分ち、それぞれを細分している。

第3~第7は、それぞれ現在通法とされている事項を簡潔に述べ、現在の歯内療法概念の祖型と考えられる。第8の根管の清掃は、やや詳細に在来の文献と花沢式の術式を述べている。

すなわち、1) 第1回治療髓腔の清掃では、軟

化牙質を完全に除去した後に、アンチフォルミン洗滌を行い、フォルモ・クレゾールを仮封セメントで仮封する。

2) 第2回根管の清掃は、必ずラバーダムを装着、大白歯にあつては根管口を拡大した後、アンチフォルミンを滴下し、抜髄針で次第に根端まで感染物質を除去、清掃する。次いでブローチに綿線維をからめ制腐剤を浸して清掃する。

3) 壊疽性歯髓炎の場合は、第2回治療時に残留歯髓を抽出する。種々な方法があるが、花沢は根端注射、又はアンチフォルミンを介してカーのリーマーで器械的・化学的に除去する。根管息肉の場合も同じであると述べている。

4) 根管内異物としては、綿線維、根充剤、器械破折片、合釘等それぞれの除去方法を述べる。

5) 根管拡大法は、機械的と化学的を併用、レントゲン写真を参照しつつ行う。アルカリの応用中アンチフォルミンが最も効率が良い事を強調する。

但し非常に狭小な根管には酸類が良いと述べている。

第9 根管の消毒は、最も紙数を割いて詳述する。先ず1)で根管消毒の必要な理由を述べ、2)では殺菌力の在来の研究を列挙する。それ以後、3)石炭酸合剤、4)チモール、5)フォルマリリン、6)クロール、7)ヨード、8)銀等の消毒力、および9)電氣的消毒法について、在来の諸研究を編集史的に紹介した。

5 奥 付

前述のようになく、第3編に続いている。

IV 第3編 根管充填の書誌学

1 装 幀

第2編と連続合本されている。

2 書誌学的構成

扉—1, 序—2, 目次—1, 本文—45 計 49 頁。書体、組版等第2編と同じ (図3)。

3 緒 言

第1, 2編と同じ

4 本 文

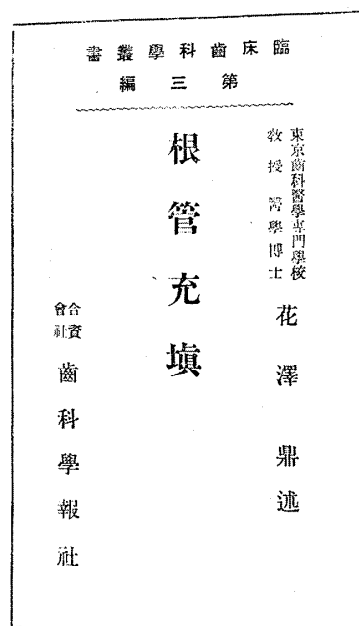


図3 根管充填の扉

Fig. 3 Title Page of "Root Canal Filling"

a) 目 次

5項目とその細分で以下のようにになっている。頁数を便宜上追記した。

第1	根管充填ノ意義	1
1	根端孔殊ニ根端分岐ノ閉鎖	1
2	管間並ニ管外側枝ノ閉鎖	2
3	歯細管口ノ閉鎖	2
4	主根管ノ閉鎖	3
5	根管充填ノ手段	3
第2	根管充填ノ前準備	4
1	髓腔ノ開拓	4
2	根管ノ清掃, 拡大, 消毒	5
第3	根管充填ノ時期	6
1	臨床上ノ診査	6
2	X線診査	6
第4	根管充填材	7
1	根管充填材所要ノ性質	7
2	充填材ノ種類	9
	(処方例)	9
3	充填剤ノ撰択	32
第5	根管充填法	34
1	根管ノ測定	34
2	根管ノ乾燥	35

3 「ガッタパーチャ」充填法	35
4 糊剤充填法	40
5 「パラフィン」充填法	43
6 「レントゲン」写真ノ撮影	45

b) 内 容

1. 根管の解剖に関する研究が諸学者の努力でめざましく進歩したために、単に主根管の填塞のみでは不充分になったとして、細分項目の1) 2) 3) においてそれぞれが有形の物質により閉鎖することは不可能であると断言し、4) の主根管の完全な填塞を根管充填と称しているのだと言う。それで5) の根管充填の手段として、第1に有形の物質を溶剤を用いて液状として可及的深部に浸潤させ、次でその溶媒を揮散させて消毒を計ること。例としてクロロレジン又はクロロパーチャー。第2には、永続性で揮散性のある殺菌剤を配合した有形の物質を、到達できる範囲内で根管に填塞し、それによって感染性の物質を長く無菌的な状態に保たしめる方法がある。例としては種々な糊剤の応用である。その他にいろいろ独自の方法の文献例を挙げている。

2. 根管充填の前準備 としては、前に詳述したように、1) 髄腔の開拓と2) 根管の清掃、拡大、消毒であるとする。

3. 根管充填の時期は、1) 临床上は挿入した綿線維が変色なく、根管内が乾燥状態で、腐敗臭がなく、打診に反応せず、歯齦部に腫脹を見ず、瘻孔の消失を基準とする。2) X線診査で術前・術後のX線像を比較し、縮小を認めること。但し完全な消失は、時日を要するので再撮影が必要である。

4. 充填剤では、1) 所要性質として Miller の1～7、その他 Mayerhofer, Albrecht, Möller, Kneschanrek らの挙げた8～14項目を挙げている。2) 充填剤の種類は多数あるが、現在は用いられぬものもあり、現今使用されている充填剤の「処方例」を以下の様に挙げる(第1～第7)。

第1 グッタベルカ製剤 10種

1) クロロパーチャ 2) クロロパーチャー・オイゲノール・チモール(マーリッド氏) 3) クロロパーチャ・オイカリ油チモール(コ克蘭氏) 4) ガッタパーチャ・パラフィン油液(プリンツ氏) 5) グッタベルカ・オイカリプトー

ル(ハーラン氏) 6) グッタベルカ樹脂クロロホルム 7) ユーカパーチャ混液(バックレー氏) 8) グッタベルカ・オイカリプトル・チモール 9) クロロパーチャ・チモール・印度ゴム 10) クロロパーチャ・パラフィン

第2 樹脂製剤 4種

1) アセト・レジン(プリンツ氏) 2) クロロレジン(キャラハン氏) 3) クロロレジン・チモール 4) クロロバルサム

第3 コロヂウム, ツェロイジン, セルロイド製剤 4種

1) コロヂウム 2) ツェロイジン 3) セルロイド醋酸アミール 4) セルロイド・アセトン

第4 パラフィン類 4種

1) パラフィン次硝酸蒼鉛パラフォルム(ダンニング氏) 2) シェクスタイン氏パラフィン 3) チモール・パラフィン(プリンツ氏) 4) パラフィン・グッタベルカ(佐藤氏)

第5 フォルムアルデヒド製剤

1) バアチャード氏 2) ハウムガルトネル氏 3) ショイエル糊剤 4) オキスパラ(ジョーンズ氏) 5) オキスパラ 6) トリオパスタ(ギーシー氏) 7) トリオヂンクパスタ 以下 9) プリンツ氏糊剤 10) パラホルム, ヨードフォルムの粉末とチモール, カンフルの液剤 11) シュレーダー氏糊剤 12) プリンツ氏糊剤(別処方) その他に無名のものや、スピーレル氏, アブラハム氏, ウィツェル氏, ハーラー氏, ショーエンブロード氏, アンドレ氏, マホニー氏など23処方を挙げている。

第6 酸化亜鉛糊剤

1) レオナルド氏乳歯用糊剤 2) ～6) 無名処方 7) プレーデ氏 8) ビュンゲ氏 9) プリンツ氏 10) バンウッド氏処方

第7 その他の処方

コーク社製剤他, 有名・無名処方8種を挙げる。

3) 充填剤の撰択

以上の様に多数の処方があるので、a) 根管が大なもの b) 小さく複雑なもの c) 感染性の有無、に分けてその撰び方を述べる。また、d) 乳歯に対してはチモール・パラフィン、または刺激性の少ない糊剤をすすめる。

5. 根管充填法

1) 根管の測定

主根管の長さを測定することが最も必要で、ラバーダムの小片を貫いた探針で、患者の感覚により根端孔に達したことを計測する。またX線撮影により確める。

2) 根管の乾燥

ペーパーポイントなどで湿気を取去り、無水アルコール、アセトン等と、エヴァン氏根管乾燥器で完全に乾燥する。

3) ガッターパーチャ充填法

コーンを用いクロロパーチャを併用するが、そのみでは不完全なので、樹脂または類似のものを併用するのが基本である。

a. 樹脂、粉末カナダバルサム等をクロロホルムかアセトンに溶解して根管内に送り、ポンプ作用で滲透させ、熱気を送って揮散させる。同様にコロジウム、セルロイドを応用する方法もあり、Howe 氏銀還元法その他もある。

b. クロロパーチャの応用。クロロパーチャにオイカリプトール、チモール、パラホルムを配合すると良い。

c. コーンを、エヴァン氏乾燥器を挿入して根管壁に圧接してそこへ新しいコーンを入れ、繰返す。

d. キャラハン氏充填法 樹脂溶液を用いる。

e. プリンツ氏充填法 樹脂とガッターパーチャ糊剤を併用

f. ジョンストン氏充填法 キャラハン氏の変法

4) 糊剤充填法

小根管には充填器探針等で充填するが、大根管はガッターパーチャコーンを核とし利用する。殺菌性糊剤として私共の使用している「トリオジンク・パスタ」の処方は（花沢）。

（粉末）パラフォルムアルデヒド 2.0 チモール 0.5 無水硫酸亜鉛 0.5 酸化亜鉛 7.0 アスベスト細末 0.2

（液）トリクレゾール 1.0 クレオリン 2.0 グリセリン 0.4（各成分を用いる理由の説明を付している）

以上を用に臨み、硝子止めパテ様の硬さに練和して用いる。

5) パラフィン根管充填法

根端孔の大きい乳歯や再植歯に応用する。無刺激性であるが永続性は疑わしい。上顎には使用し

にくい欠点がある。パラフィン円錐をあらかじめ作っておいて用いる。

6) レントゲン写真の撮影

充填の良否を判定するため、根管充填終了後に撮影する。

5 奥 付

大正14年7月29日印刷、8月1日発行。正価45銭。花沢 鼎著。他は第1編と同じである。

V 第4編 歯牙再植術の印刷原稿の断片について

4編「歯牙再植術」、5編「歯髓切断法」は、歯科学報の広告に出ているので出版されたことは確実である。但し残念ながら原本の所蔵がないので、本学資料室に所蔵の印刷原稿の最初の2頁を提示し、その内容が歯科学報に掲載された花沢指導の縣、杉山の再植術についての論文の集成であることを示したいと思う。

所蔵原稿第1、2頁を図4、5に示す。図4はその項目第一、緒言の部分で、以下のように読める……

「

第四編 歯牙再植術

医 学 博 士 花 沢 鼎
東京歯科医学士 杉山不二

第一 緒 言

再植術に関する文献は随分澤山にあります。本邦では大正八年十二月の日本歯科医学会々誌に掲載された本校の酒井揆一氏の論文が傑出したものであり、最近に於てはロース氏の研究成績

Neuere Versuche über die Replantation der Zähne mit besonderer Berücksichtigung einer eigener Fixationsmethode von Anton Loos, Vierteljahrsschrift für Zahnheilkunde. Heft 1. 1924

が有名であります。本校における最近二三年間の実験報告は、縣、杉山氏等の手によりて……（以下不明）」

図5は第二頁の部分で冒頭は欠けており、以下のように読める。

「

第二 再植術の意義

再植は Replantation とか Reimplantation と

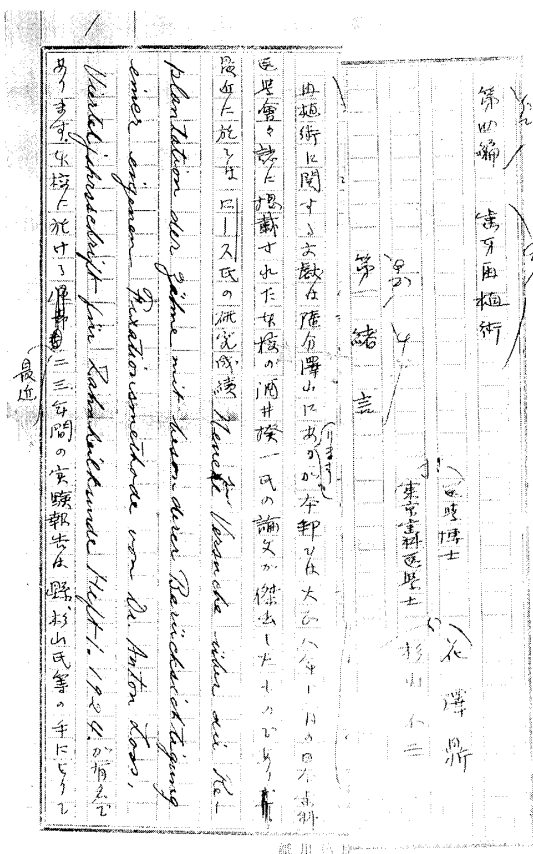


図 4 歯牙再植術の原稿第1頁

Fig. 4 Manuscript of the "Replantation of Teeth", the First Page

か申しますが、前者が「ラテン」語の replantare から出た言葉で re は再び、plantare は植える、即ち to plant again の意味であり、後者は「ラテン」の reimplantare から出た言葉で、re は再び im は in と等しく、従って再び植え込む又は嵌植する to implant again の意味であります。其他歯牙の移植 Transplantation とか嵌植 Implantation とかいう方法もありますが、実際に於ては応用せらるゝことが極めて少いか、又は其成功率が甚だ乏しいものであります。

再植術の意義は云ふまでもなく、主に難治なる疾病の原因を除く目的を以て歯牙を一度抜去し、口外に於て適当なる手術を施した後再び之を同一歯槽窩内に嵌植する方法であります。然し健康なる歯牙が外傷に依りて脱臼した場合にも応用されます。

第三 歯牙再植術の適応症（原文は旧漢字）

以上は勿論断片的原稿であるが、印刷割付のた

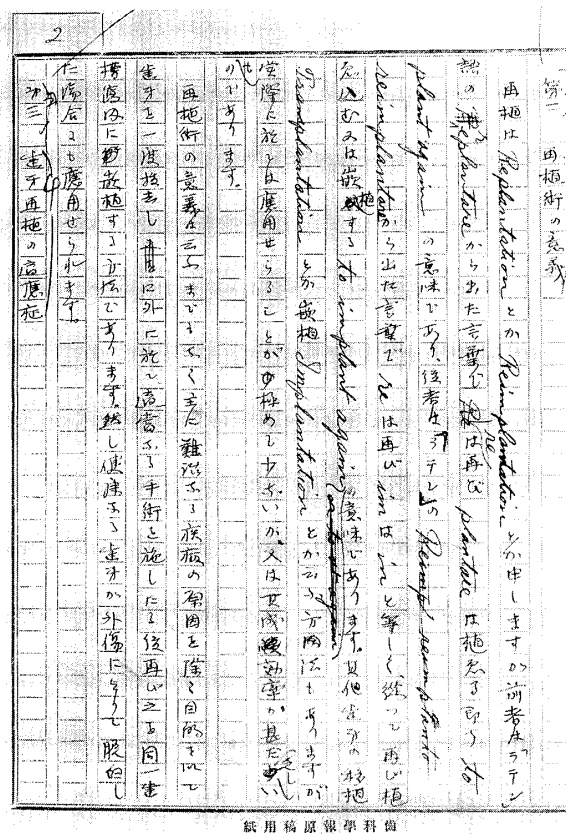


図 5 歯牙再植術の原稿第2頁

Fig. 5 Manuscript of the "Replantation", the Second Page

めの符号がついており、出版印刷の後手許に残して保存したものであろう。現在のようにコピー器のない時代であるから、写本としての価値は大いにあ^{あがたきよし}ると考えられる。縣清、杉山不二は共に当時付属病院に助手として勤務した新進の研究者であった。歯科学報にはそれぞれ花沢教授指導の研究・臨床症例報告の形で論文が連載されている⁸⁻¹⁰。この文献10が第4編の基本になったと考えられる。

VI おわりに

臨床歯科学叢書は、関東大震災後の教科書払底の時代に、日進月歩の欧米歯科界におくれをとるまいと研究した成果を、臨床講義ノートまたはハンドブックの形で編集したものである。1～5編は主として保存学分野の各領域の最新の理論・臨床術式を述べている。今日の保存学分科の祖型が日本の土壤で凡てき上ったその基礎をなすものであるといえる。

文 献

- 1) 森山徳長, 石川達也, 長谷川正康: 東京歯科医学院講義録 (第2集) 歯科医学講義および (第3集) 新纂歯科学講義の書誌学. 日本歯科医史学会々誌 17(2): 97-102, 1991.
- 2) 森山, 石川, 長谷川: 東京歯科医学専門学校「歯科学講義」の書誌学. 日本歯科医史学会々誌 17(2): 103-107, 1991.
- 3) 森山徳長, 太田 実, 石川達也, 長谷川正康: 東京歯科医学専門学校歯科学叢書の比較書誌学的研究. 日本歯科医史学会々誌 18(4): 283-286, 1992.
- 4) 長谷川正康, 森山徳長, 田辺 明, 小幡哲夫, 石川達也: 明治大正期歯科保存学書の比較書誌学的研究. 日本歯科医史学会々誌 (本号投稿中).
- 5) 花沢 鼎, 岩沢 力: 歯槽膿漏ノ病理及療法ノ梗概. 歯科学報社, 大正14年7月15日.
- 6) 花沢 鼎: 根管ノ解剖, 清掃, 消毒. 歯科学報社, 大正14年8月1日.
- 7) 花沢 鼎: 根管充填. 歯科学報社, 大正14年8月1日.
- 8) 縣 清: 歯牙再植術に関する実験例報告 (其一, 二, 三). 歯科学報 27(12): 25-31, 1922, 28(1): 21-26, 28(2): 37-42, 1923.
- 9) 杉山不二: 歯牙再植術実験例報告 (第二回其一, 二, 三, 四, 五). 歯科学報 29(12): 39-44, 1924, 30(1): 20-25, 30(4): 47-51, 30(10): 33-37, 30(11): 35-39, 1925.
- 10) 花沢 鼎・杉山不二: 臨床講座 歯牙の再植に就て (其一, 二, 三). 歯科学報 30(6): 28-36, 30(8): 43-49, 30(9): 43-46, 1925.
- 11) 遠藤至六郎: 口腔外科診療の実際. 歯科学報社, 昭和10年—8版昭和17年.

著者への連絡先: 森山徳長

〒112 文京区白山5-3-12

Tel. 03-3812-2950